

## 編集委員会便り

4月17日の第1回編集実行委員会終了後、林委員長の肝煎りで簡単なビアパーティが持たれ、こちらでは委員長が「ダジャレ学」の特別講義をされているかと思えばこちらでは若い女性の「朝シャン」がエネルギー問題に及ぼす効果が論じられるなど和かに一刻が過ぎたが、本誌の創刊から委員を勤められた穂積委員が今回で飯島委員と交替、去られることになったため図らずもお別れパーティの形にもなり、昔話にも花が咲いた。考えて見れば私も創刊からの委員の1人であり、月日の経つのは早いもの、いつか取残された形になったようである。

振返ってみれば昨年惜しくも逝くなられた初代委員長佐藤俊京大名誉教授のもと毎月の様に会合を開いて本誌の基礎固めをしていた頃が懐しく思い出される。それはまた余り広い視野を持っていなかった私にとって素晴らしい勉強の場でもあった。その結果、現在の形の特集を柱とした誌面作りが確立したのであるが、その特集が好評であるのは本当に心強い限りである。しかし、その内幕は仲々苦勞が多い実状である。一つの特集は7～8件の依頼論文で構成されるので、特集のテーマがいくら魅力的でも執筆陣が構成できなければ何にもならない。読者の方々の中にはどうしてあのテーマが特集に出ないのか疑問に思われることもお有りではないかと思うが、この様な事情によるものもかなりある。また、原稿執筆にしても多忙な方々をお願いするのでかなり余裕を見ることになる。そのため、執筆陣の手配、正式依頼、執筆、印刷の日程を繰って見るとテーマの正式決定は最短で発行の9ヶ月前となる。したがって、この時差を感じさせない、先見性のある企画をすることが我々委員に課せられているのであるが、実行委員会メンバーを代弁させて頂けばよく健闘していると合格点を頂けるものと自負している。

本誌が直面している問題の一つは報文欄の比重である。これについては読者の意見も強化論と不要論に二分している。この一因として考えられるのは、私見では本誌のような学際誌にふさわしい研究論文に対する共通認識がまだ必ずしも確立していないことであろう。これこそ「エネルギー・資源」の報文だと文句なしに言えるものの数が増えて来れば認識も改まって来るのではなからうか。奮っての報文投稿をお待ちしている次第です。

なお、談話室の欄は読者の皆様の為の自由な発言の場です。自由なご意見をどしどしお寄せ下さい。

中西重康

姫路工業大学産業機械工学科教授

